

聖書箇所：ルカの福音書 8章 16～18節

説教題：持つ人、持たない人

1 不公平だ！

イエスが語ることは、ときどき私たちの常識と正反対のことに聞こえてしまい、戸惑うことがあります。今日の箇所もそのひとつでしょう。「持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取りあげられるからです。」私が聖書に会ってまだ間もない時のことですが、この箇所を読み、こんなことを思いました。「神はなんて不公平な方なんだろう。どうしても理解できない。」皆さんはいかがでしょう。

神は公正で義なる方です。不公平なことを最も嫌われる方です。その方がこんなことを言われるとは不思議です。なにかきちんとした理由があるはずですが。

2 あかりのたとえ

(1) 隠れているもので、あらわにならぬものはない

16節でイエスはあかりのことを取りあげています。二千年前、部屋が暗くなればオリーブ油を燃やしてランプとじていました。そのランプを玄関に置き、外から来た人は目当ての家がすぐわかるように、あるいは玄関の場所がわかるようにと目印としても用いました。あかりをつけておきながら、それを箱でおおったり、わざわざ見えないようなところに置く人はだれもいません。あかりは、かならず人の目に触れるような場所に置かれます。

そんなあかりのたとえを使って、「隠れているもので、あらわにならぬものはなく、秘密にされているもので、知られず、また現れないものはない」と言われました。いったい「隠れているもの」とはなんのことでしょうか。いったい「秘密にされているもの」とは何を指しているのでしょうか。実は二つあります。

(2) イエス・キリストの光 私たちの闇である罪

結論から言います。一つは光となられたイエス・キリストのことです。そしてもう一つは、私たちの闇である罪。この二つは最初は隠されているけれどやがていっしょに現れてくると言っています。

ランプは必ず人の目に触れるような場所に置かれます。ランプが放つ光は闇を照らし、見えなかったものを見えるようにする働きをします。最初から明るい部屋だというのならランプはいりません。闇があるから光が必要です。

イエス・キリストと私たちの関係も同じです。私たちのうちに罪という闇があります。闇のことを取り扱うためには、光が必要です。この方は闇を照らします光となられ、闇の中にあるものを人の目に触れさせるように働かれています。この光と闇がどのようにしてあらわになってくるのか。次にその事を見ます。

3 聞き方に注意しなさい

(1) 「お金」「能力」？

18節はこうです。「だから、聞き方に注意しなさい。というのは、持っている人は、さらに与えられ、持たない人は、持っていると思っているものまでも取りあげられるからです。」

17節と18節はどうつながっているのでしょうか。何か唐突に18節が出て来たように感じられるのではないですか。

それにわからないことがあります。「持っている人」「持たない人」とあるけれど、いったい何を持っているのか、何を持っていないのか。その説明が抜けています。

こんなとき皆さんはどう読むでしょうか。おそらく多くの方は頭の中でことばを補って考えるはずです。すぐに思い浮かぶのは「お金」とか「能力」ということばです。あるいは、「健康」とか「容姿」ということばを当てはめる方もいるでしょう。いずれにしても続いて出て来るのが、「神はあの人に与え、私には与えなかった」という不満です。でもよく読みますと、ここには「お金」とも、「能力」とも書いていないのです。いったい何を持っているとか持っていないと言うのでしょうか。ここを正しく理解するためには、このことをはっきりとさせる必要があります。

(2) 何を持つのか、持たないのか

そもそも、イエスは どうしてこんな言い方をされるのでしょうか。不親切ではないかと思うほどです。最初からきちんと「何を持つのか、持たないのか」、はっきりと書いてくれたら悩むことはありません。もちろん不親切ということではありません。わざと語らない

のです。

ヘブル書にこうあります。「神のことは生きていて、力があり、両刃の剣よりも鋭く、たましいと霊、関節と骨髄の分かれ目さえも刺し通し、心のいろいろな考えやはかりごとを判別することができます。」(ヘブル4章12節)

私たちの心の心の中にあることをあぶり出すために、あえて不親切とも思える言い方をしているのです。

どういうことでしょうか。イエスは闇を照らす光であると言われます。その闇は私たちのうちにあります。イエスは私たちのうちにいる闇を照らそうとしています。どのようにしてでしょう。わざと大切なことを言わないのです。「何を持つか、持たないか」ということをあえて言わない。言わないので、私たちは心の中でとっさに思い浮かべる。「それはお金だ。」「それは能力だ。」実はその瞬間、イエスは光となって私たちの闇を照らし始めたのです。例を挙げましょう。

私が学んだ中学校には、農家の子供と、サラリーマンや自営業の子供がだいたい半半ずつ通っておりました。貧しい家庭の子どももいれば比較的裕福な家庭の子どももいました。あの人は持っているのに、自分は持っていない。そういう違いがどうしても目に入ってきました。自分も同じものが欲しいと思いました。でも家が貧しいので親に言っても無理だと子ども心にわかっていました。持つことのできる環境に生まれた人たちと、持つことが難しい環境に生まれた人たち。そんな現実を何度も見せつけられてきました。

学校や会社に入れば、自分は「できる人」なのか「できない人」なのか、いつも比較をしながら生きてきました。ですから、「持つ

ている、持っていない」と言われるとすぐに「お金」とか「能力」を連想しました。思い浮かべたということは、私たちの心の奥底にあったものが表に出て来たということです

(3) 隠れていたものがあらわになる

もしこれが最初から丁寧に説明されていたのなら、こうはならなかったでしょう。不親切に思える表現だからこそ、心の中のことが出て来ました。そして光があてられていきます。

光があてられるといろいろなことが見えてきます。最初は、「神は不公平だ」と怒りを神に向けておりました。ところが光の中で見ると、問題は自分のほうにありました。自分の中にあるコンプレックス、人と比べてしまう性質、もっと言えば「ねたみ」ということです。モーセの十戒にある、「すべてあなたの隣人のものを欲しがってはならない。」この戒めを破っていた。つまりは自分の中にある罪が怒りを引き起こしていたことに気がつきました。

17節から18節はいきなり脈絡もなく飛んでいるように見えました。でも、実はきちんとつながっていました。18節の「持っている人は、さらに与えられ」というみことばを聞いた瞬間、自分の中の闇の中に隠れていた罪があらわになったのです。イエス・キリストの光があてられ、自分の中で秘密にされていたものが、表に浮かび上がってきました。

4 闇を照らし、闇を背負われるイエス

イエスは、聞き方に注意して持っている人になりなさいと勧めておられます。私たちが知りたいのは、ではどうしたら持っている人になれるのかです。すでに失敗例を挙げて説

明してきましたから、もうおわかりでしょう。

最初ここを読んだとき、神は不公平だと怒りました。しかし次第にどうして自分は怒るのかと考えるようになりました。やがて自分の聞き方に問題があるのではないかと目が開かれていきました。このようにして、イエス光は私の闇を照らし始めていきます。

イエスの光に照らされて何が見えたでしょうか。何も良いものがない自分が見えます。人をねたむ自分がいます。神は間違っていて自分こそ正しいのだと言い張る自分がいます。人を傷つけ、赦そうとしない自分がいます。そんな闇が自分の中にもあることなど認めたくありません。できれば逃げ出したいとだれもが思います。見たくないと思うものにふたをすることは簡単です。でもイエスは言われます。「隠れているもので、あらわにならぬものはない。」どんなにしっかりとしたふたをしようか、結局いつかは表に出さなければならないときが来るとイエスは警告されます。

私たちを責めるためにこんなことを言うものではありません。イエスは光で照らしてくださりながら、こう言ってくれるのです。「わたしの光であなたの闇をよく見えるようにしてください。あなたはこのことで苦しんでいたのですね。あなたの痛むところをわたしによこしなさい。わたしがあなたの代わりに背負うから。」

イエスは私たちの光です。でも、ただ暗いところ照らす光という意味ではありません。私たちが見たくないと思っていた闇を背負う光です。

闇の中には良いものなどひとつもありません。でも、この方は十字架でいのちをお捨てになり、ご自分のからだを豊かに与えてく

だり、こう言われます。「あなたは豊かに持っている。もっともっとわたしから受け取り、さらに持つ者となりなさい。」

みことばによって私たちの闇があらわになっていきます。闇に光があてられていきます。闇と光。この二つはいつもいっしょです。罪のあるところにイエスのお姿が現れてきます。このことをパウロはこう言っています。

「罪の増し加わるころには、恵みも満ち溢れました。」（ローマ5章20節）

闇を光に変え、恵みを与えてくださる主を仰ぎ見て歩んでいきたいと願われます。